巻　頭　言

竹村　彰通
東京大学大学院情報理工学系研究科

昨年（2009 年）の 6 月末にソウル大学で第 1 回の環太平洋地域の統計確率関係の国際会議が開催された．会議の名前は The first Institute of Mathematical Statistics, Asia Pacific Rim Meeting（IMS-APRM）という．Institute of Mathematical Statistics（IMS）はアメリカに本拠を持つ数理統計学の国際学会である．ただし確率論の研究者も多く所属している．IMS は Annals of Statistics および Annals of Probability を発行しており，これらはそれぞれ数理統計分野および確率分野の最も権威ある学術誌と考えられている．

この IMS-APRM 会議は，中国出身の Jianqing Fan が IMS の会長（2006-2009）であった時にイニシャチブをとって創設したもので，私自身は 2006 年 12 月に台湾でおこなわれた準備会合の時から何となく日本を代表する形で関わっていたために，昨年の第 1 回の会議には日本からのプログラム委員の形で参加した．特に，日本の確率論の伝統をアピールするために，確率分野の Plenary Speaker として福島正俊先生をプログラム委員会に推薦し，これが実現した．福島先生には日本の確率論の歴史を含めて非常に興味深い講演をしていただいた．ただ，韓国は日本と同様，統計関係の学会には確率論関係者の参加が少ないことが残念であった．IMS 本体が主催する学会では統計と確率が割合バランスよく代表されているが，韓国や日本ではあまり交流がない現状である．

さて，第 1 回の IMS-APRM 会議中に，まさに恐れていたことであるが，プログラム委員会の夕食会において周囲の視線が私に向けられ，第 2 回を来年 2011 年の 7 月に日本でやることを引き受けることとなってしまった．個人的な事情からも，いずれ日本でやるならば早いほうがいいとも思っていたので，引き受けることとした．巻頭言の場を借りて，会議の宣伝をさせていただく形になってしまっているが，ご容赦願いたい．

この会議を引き受けるにあたって，まず気が重かったのは，ソウル大学での第 1 回の大きな成功である．会場には，会議のために用意されたおそろいのジャンパーを着た大量の学生アルバイトが熱心に会場の世話をしていた．100 名近くいたであろうか．日本の今の学生にはこのようなことは全く期待できないであろう．またそれを支えていたのが会議への順調な寄付であった．会議の banquet にはソウル市の副市長やミス韓国なども参加し，

民族舞踊も披露された．会議の主催者であったソウル大学の Prof. B.U. Park に集会の財政規模について尋ねたが，日本では考えられない寄付等の規模であった．

第 1 回会議には 700 名以上の参加者があり，その半分は海外からの参加者であった．特に，アメリカに在住する中国人の統計研究者が 200 人近く参加していたと思う．中国からアメリカの統計学部に留学し，Ph.D.をとってアメリカの大学に職を得ている中国人である．韓国でも，統計学科の優秀な院生の多くはアメリカに留学して学位を取得している．彼らはまさにアメリカ流の統計学の最先端を担っており，論文の生産などの面でも非常にアグレッシブである．彼らの目には，統計学とはアメリカ流のものであり，日本の統計学はほとんど視野にはいっていない．日本の統計学は，それなりの伝統の中から，実験計画法，モデル選択，情報幾何などの分野で日本発の独自の貢献をしてきた．しかし私の目には，中国・韓国とアメリカのはざまで，日本の統計学はまさに量的に埋没しつつあるように思われる．そして，量が質に転化するのも時間の問題であろう．

来年 7 月の第 2 回大会では，海外からの研究者を歓迎するだけでなく，日本の統計学の研究をできるだけアピールすることを目指している．また，確率論研究者の方にも，日本の確率論をアピールする場として利用していただくことを期待している．興味を持っていただけた方は，以下の web サイトをご覧いただければさいわいである．
http://www.ims-aprm2011.org/